

俳人協会會報

1970年

3月

No. 31

石田波郷氏哀悼

村山古郷



悼 石田波郷氏

昭和四十四年十一月二十一日石田波郷氏長逝。満五十六歳八カ月、数え年五十七歳であった。

波郷氏は大正二年三月十八日生れ、昭和三年十六歳中学四年生の時句作を始め昭和七年「馬酔木」新樹集に巻頭を占めて翌二月上京した。この頃から俳壇への登場と見てよいであろう。以後逝去まで約四十年、その間戦後の二十年は病患と闘いながら、常に当代俳句の代表的な第一流の作者としての地位を占めた。華々しく、かつ清高の生涯であった。

波郷氏が師事した横光利一氏は、波郷氏に「君は必ず小説を書くようになる、書かすにはいられないよ」といったことがあるという。しかし波郷氏は遂に小説を書かなかつた。波郷氏は俳句一筋の道を守り通した。「鶴の眼」「大足」「風切」「病雁」「雨覆」「胸形変」「惜命」「酒中花」などの業績がその生涯を飾り、かつ、昭和俳句史を彩る。見事な俳句作家の一生であったと思う。

波郷氏は初期の「馬酔木」に豊醇の自然描写を学び、やがて連作俳句、人生探究派の一人と目される時には私小説的で

人間味濃厚な諷詠に傾いた。しかし新興俳句の青年たちが多く無季に奔った時も「身辺殆ど無季俳人の観あり」と嘯きつつ、ひとりこれに与しなかった。「頑迷なる有季派」「古典と競い立つ」「俳句は文学でない」などの言を吐きつつ、「猿蓑」の古格に学んで韻文精神を極める姿勢をとった。波郷俳句の骨格は、この過程に成った。豊麗なりリズムと高い格調に青春の詩をうたった。そして現代俳句に生き生きとした近代の息吹をふきつけた。この波郷俳句の展開は、同時に現代俳句史の展開でもあった。石田波郷という俳人は、その歩みの一駒一駒を昭和俳句史の中に刻みつけた人であった。

出征、発病、大手術、再三の手術。戦後の波郷氏の歴史は、病患と、病中の俳句の哀歎に彩られる。その中で「現代俳句」を創刊し、「鶴」を復刊し、現代俳句協会を設立し、「馬酔木」に復帰し、俳人協会を興し、そうして「胸形変」以下凄美至純の病床吟を吐いた。読売文学賞詩歌部門、芸術選奨文部大臣賞をも獲得した。病苦に呻吟した不幸の月日は別として、身を以て俳句に生き抜いたことは、俳句作家として本懐であったろうと思う。

「現代俳句の吊鐘は俺がついてやる」と波郷氏はいったと聞く。どういふ時に波郷氏の口を衝いて出た言であるかその点審らにしないが、正しく波郷氏の言で

あるとするならば、これは波郷氏の高邁なる殉俳の精神、裏返していえば、俺の生きていく限り、現代俳句を減びさせてたまるかといった自負と自恃と精神の進りであろう。歎称すべき作家の気魄である。

昭和三十三年三月、波郷氏は練馬の谷原、今の高野台に新居を建てて移って来

第九回 全国俳句大会

第九回全国俳句大会を左記の通り開催いたします。これは俳壇の主な結社が合同して、しかも全国的な規模で行なう俳句大会です。奮って御応募願います。

▽応募 二句一組(雑詠・未発表のもの、原稿用紙使用)何組にてもよし、会費一組につき三百円を同封して横浜市港北区下田町九二四(〒222)俳人協会「全国俳句大会」係あて、五月十日(当日消印有効)までに送って下さい。

▽選者 水原秋桜子・富安風生・山口誓子・山口青邨・阿波野青歌・野村喜舟・秋元不死男・安住敦・福田夢汀・平畑静塔・石塚友二・石川桂郎・星野立子・角川源義・岸風三樓・皆吉爽雨・中村草田男・中村汀女・大野林火・香西照雄・後藤夜半・米沢吾亦紅・佐野まもる・遠藤梧逸・橋本鶴二・能村登四郎・大橋桜坡子(願不同)

▽発表 表 七月十九日(日)午後零時半より、朝日新聞東京本社講堂で行ないます。

▽賞 入賞者には俳人協会全国俳句大会賞・朝日新聞社賞・特選句には各選者の短冊または賞品。

▽なお、当日は水上勉氏(題未定)・皆吉爽雨氏(写生について)の講演があります。(入場無料・満員のときはお断り)

主 催 俳 人 協 会
後 援 朝 日 新 聞 社

られた。それから数年の間が戦後における波郷氏の一番元気で、それ故に最も平安で最も幸福な時代であったであろう。波郷氏歿後に出来たあき子夫人の句集「見舞籠」の中に、「わが願ひ大方満ちて落葉焚く」という句がある。昭和三十四年の作。この句の詠まれた当時の忍冬亭の倅せの日を思い、かつは、喪に服されている今日の夫人の心情に思い到って涙のあふれ出るのをこらえることができない。

その頃から波郷氏は、庭一ぱいに各種の椿を植えて、且暮の楽しみとされた。波郷氏がこんな庭木を愛好する人だとは思いつかなかつた。何故と云うことなく、ただそう思っただけであるが、私は家が近いので、おりおりお邪魔しては、波郷氏の楽しい椿花の話に耳を傾ける日もあった。酒中花貴宝殿、太郎冠者など椿の珍種や花

の趣きもいろいろ教わったが、忘れっぽい私は大方忘れた。ただ思い出すのは、波郷氏との歎談のなつかしい日のことばかりである。

昭和三十九年の春、波郷氏の忍冬亭で椿祭が催され、私も招かれた。百花繚乱といった趣きの庭を眺め、酒盃を傾けつつ句会をした。私の向う側に、鈴木真砂女さんのおられた姿を、昨日のこのように思い出す。翌くる年は、今日椿祭という四月十一日の朝、俄かに呼取困難となつて入院され、中止になった。その後も退院、入院がいく度か繰り返され、しかも入院の日が長くなるようになって、椿祭の日が再び来なかった。

その間、波郷氏病篤しの報にたびたび驚かされた。この大切な人を。そう思つて、必死に神に祈る気持になった。その都度、奇蹟のように波郷氏は回復された。どんなに嬉しかったことか。しかしとうとう別れの日が来た。昭和四十四年十一月二十一日の朝。

波郷氏ほど愛惜された人はない。俳句にすぐれたばかりでなく、誰にも慕われる天稟の資質をそなえた人であったからであろう。この頃、手許に来る俳誌を繙くと、波郷氏とは縁のなかつた誌上ですら、「波郷亡し」の句を見ないことはない。愛惜にたえない人だった。

昭和四十五年度総会御案内

日時 昭和四十五年三月二十八日(土)午後一時より
場所 東京大神宮会館 (電)03-2621-3566
千代田区富士見二-4-1 国電・地下鉄とも飯田橋下車、五分

議題
1 昭和四十四年度事業・決算報告
2 昭和四十五年度事業計画・予算案

授賞式 第九回俳人協会賞授賞式(相馬遷子氏)
講演 石田波郷雑感 石川桂郎氏

なお、総会終了後、懇親会を致します。万障お繰り合せの上、御出席下さい。

各 位

俳 人 協 会

「たかのは」

長谷川かな女先生回顧

山本 嗟迷

先生は、生来病弱であつた故か、はにかみ屋で、円満、謙虚な人柄は誰にも愛され、親しまれたが、弟子に対しても勿体振ったり、師匠顔をされることは生涯無かつた。

根が江戸っ子だから金銭には淡泊で、義理堅く、例えば先生の古稀、喜寿、傘

寿、紫綬と、その都度委員が集つて祝賀の相談を始めると、一方長谷川家では、すぐ先生と秋子夫人が、返礼の準備に掛られるという工合である。

数年前までは、よく銀座へ出たり、浅草の観音さんへお詣りされたりしたが、驚のように敏捷に人混みを縫つて歩かれ



悼 長谷川かな女氏

た。そしてあの店、この店と出たり入ったりして小買物を楽しめた。

女のお弟子達は、先生のことを蔭でカイイ虫などと愛称したりして喜んでいたが、それほど出好きで買物好きであつた。

作家としての先生の注意力、知識欲の旺盛なことは、壮年時から知られていたが、晩年健康上、行動を制約されるようになってからは、銀座散歩のごときも先生にとつては、唯一のレクリエーションであり、或る程度、知識欲を充たすものであつたろうと、いじらしく思われるのである。

読書は亡くなられる十日前まで続いた。それとテレビ、来訪者との対談などから、新しいことを能く吸収しておられた。

先生の場合、作家として、また選者としての勉強は、八十二歳の天寿を全うするまで、懈怠なく行われた。その点表に立派だった、と思うのである。

知識欲もだが、先生はやはり江戸っ子だけにやや物見高い無邪気さもあつた。

凡そ三十年前。当時先生五十歳余。

浅草で何かの会があつた後、先生と公園を散歩して帰ろう、ということになつた。

雷門から六区の方へ歩いて行くと、ストリップ小屋の前に出た。ちょっと立ち止まって絵看板を見上げたが、先生が

「はいつて見ましようか」と云われる。

その声は笑つて居られたが、必ずしも冗談とは思われなかつた。若し私が「ハイ」と云つたら、先生のことだから私を待たず、サッサと切符の窓口へ進んで行かれたらどう。

先生には何かお考があつたのかも知れないが、私にはその度胸が無かつた。

「余り女の人は入っていないでしようね」と云うと、「ああそう」というようなことで其処を離れ、二人は映画を見て帰つた。

昭和二十六年七月のこと。先生還暦過ぎ。「水明」恒例の夏行課題に「魚」と「土」が出た。これを夏の季で詠むのである。

或夜、句会の片隅で、K君と紫黄と私の三人が、油壺の水族館へ魚を観察に行こうと内緒話をしていて、先生は感付かれてしまった。私も連れて行け、と仰有るのだ。

実は先生にも仲間にも、秘密に行くつもりであつた。それに交通不案内の荒っぽい土地へ、先生をお連れするのは、どうも危険で気が進まなかつた。

だが、先生が余りに熱心に、私も魚が見たい、魚のことを知りたい、と云われるものだから、もう置いて行くことは出来なかつた。

少々無理と思いますが、お供しましう、と云うと、先生は童女のように手を

うってよろこばれた。

油壺行は案の定難行であった。

三崎までは電車で行き、それから先きは車を使うつもりであったが、その日は三崎の祭礼にぶつかり、車の影すら無く町はたいへんな混雑である。

炎天に灼かれ砂埃りを浴びながら、私達は小一時間もバス待ちの長い列の中にいた。

先生が貧血でも起されたらどうしよう、と不安でならなかった。

バスが来て、私達はやっとステップに足をかけることが出来た。バスは開扉のまま発車した。いま考えても背筋の寒くなるような話である。

油壺は天国であった。帷子に博多帯の先生と、浜木綿の水族館は画になる風景であった。

私達は来た甲斐のあったことを喜び合ひながら、水槽の魚族と鼻突合せて小半日、ゆっくり遊び暮した。

先生は、一つの水槽の前に行つて動かれなかった。十五六センチの、鰻よりは細身の瀟洒な海魚に見惚れておられたのである。

第一回 俳句講座ご案内

俳句の歴史と理論・秀句鑑賞と実作指導を通して、作句に役立とうとする公開講座です。「俳句講座賞応募」の特典もありますので、奮ってご参加願います。

▽日時 七月～八月の毎週火曜日 午後六時から八時半

▽会場 三會堂ビル(九階) 石垣記念ホール

電話 〇三―五八二―七四五―

― 地下鉄・都バス「虎ノ門」下車五分

▽定員 先着一五〇名

▽会費 三、〇〇〇円(俳人協会員に限り二、五〇〇円)

▽申込 電話で俳人協会(〇四四―六一―四八七八)へ。申込み期間 五月一日～七日の午前九時～十二時まで。

▽講師 水原秋桜子・沢木欣一・角川源義・村野四郎・平畑静塔・大野林火・皆吉爽雨・石川桂郎・中村草田男・安住敦・木俣修・三谷いちろ・能村登四郎・清崎敏郎・秋元不死男(順不同)

▽俳句講座賞 本講座の受講者から「第一回俳句講座賞」の応募作品をつのり、賞を贈ります。

主催 俳人協会

事業部だより

○ 俳人協会全国大会

今年には諸般の事情で、例年よりやや後れて別掲の通り開催されます。

○ 俳句講座

七月八月の両月、八回にわたって、水原秋桜子、中村草田男以下の大家を講師として俳句講座を開催します。詳細は別掲の通りですが、俳壇では初めての試みです。この機会には是非ご参加をおすすめします。

○ 俳句色紙短冊展

九月上旬、新宿、京王百貨店にて、当協会所属の大家の色紙、短冊を入手したいというご希望が多いだけに、有意義な催しと期待しています。詳細は本会報の次号に発表します。

○ 関西大会、九州大会

関西大会は例年の如く、十一月頃に

開催されますが、本年より、九州大会も開催すべく準備をしています。

○ 会員懇親吟行句会

昨年は鎌倉で行い、好評を頂きましたが、本年は岸風三樓幹事にお願いで市川で開催することに致します。

○ その他

地方在住の会員諸兄から、協会の催しが東京大阪に偏重しているとの声を伺っています。たしかにその通りと存じます。しかし、本年は手一杯の予定を持っていきますので、申しわけありませんが、そこまで手が廻りません。来年度は何か考えてみたいと存じます。受入側の地方で何か具体的なお考えがあったら、教えて頂きたいと思えます。

(草間)

お 願 い

四十五年度協会費(一、二〇〇円)未納の方は至急御送金下さるようお願いいたします。

あて先 俳人協会

横浜市港北区下田町九二四
振替東京二七三

(協会費は規約にもございますように前納することになっております。)

二月常任幹事会

時間 二月十二日(木) 六時より九時四十分まで

出席

岸風三樓、轡田進、秋元不死男、鷹羽狩行、原裕、上田五千石、林翔、成瀬桜桃子、松本旭、福田夢汀、沢木欣一、能村登四郎、香西照雄、安住敦、有働亨、岸田稚魚、加倉井秋を、加畑吉男、清崎敏郎、草間時彦

議題

- ① 岸幹事より、本年度総会を別掲会報(No.30)の通り、三月二十八日東京、大神宮会館で行なう。なお当日十一時から評議員懇談会を例年通り催す。記念講演は石川桂郎氏に依頼、了承を得た。全会員への通知は月末までには発送の予定と報告あり
- ② 続いて、岸幹事から現在会員が死亡した場合、弔慰についての取り決めがないのでこの際内規的なものを作ったらとの提案があり、一同賛成。長期療養、火災、水害等の場合はどうするかとの問題もあったが、状況判断が仲々難しいので死亡に限ることとし、成案を轡田幹事に一

任。

- ③ 経理担当の松崎幹事が欠席のため代って鷹羽幹事から四十四年度決算および本年度予算案の説明あり、諸物価高騰のため予算編成が苦しい且つ、すべてを会費でまかなうという健全財政の建前からもこの際できれば会費の値上げをしたらとのことであったが、まあ今年一年は辛棒し、その代りとりあえず入会金の千円を二千円にしたらという意見が出て、一同賛成。総会にはかることとした。
- ④ 右審議の過程で、かねて懸案の社団法人にしたらどうかとの意見が出て、本件は岸幹事が早急調査、関係方面と接渉することとなる。
- ⑤ 有働幹事が先般、九州方面に旅行の際、現地会員と懇談した報告に基づき、九州大会の規程、日取り等について協議、皆吉副幹事長に最終的取り纏めをして貰うこととなる。
- ⑥ 成瀬幹事から「俳句色紙短冊展」を九月上旬頃催す計画について説明これについては、展示する作家、お

よび頒布価格等については今すこし事業部において再検討の上決定して欲しいということになる。

- ⑦ 鷹羽幹事から「俳句講座」開催計画について説明、了承。

- ⑧ 能村幹事から新会員として次の各氏の推選案が出され、全員賛成。
(カッコ内推選者)

柴田白葉女(能村登四郎・福田夢汀) 浅原ちろろ・大場美夜子・河上風居・木下春・三谷貞雄・鈴木青園・橋本花風(富安風生・岸風三樓) 谷口秋郷・若月瑞峰・安田健司(沢木欣一) 加藤木紫葉(平畑静塔・鷹羽狩行)

- ⑨ 岸幹事から、これまでの事例として折角新会員として推選されながら入会手続をしなかつたり、会費を滞納する者があるので、今後は推選者は自分の推した者については、そうしたくないよう一切の責任を持つ、いわば身元保証人的な立場であ

って欲しいとの発言があり、全員賛成。そこで、秋元議長は本件を特に幹事会了解事項として確認、内規的に取り扱うこととなる。

- ⑩ 林幹事から「現代俳句選集」は現在七一人集まっている。締切が三月十日なので、期日までには全会員提出して欲しいと要望。

⑪ 最後に加畑幹事から、会報がこれまでとかく遅れ勝ちであったことをお詫びする。今年からは、隔月発行を期し、内容的には中央・地方を固く結ぶたのしくて為になるものになりたい。については会員の感想、あらゆる行事、消息、住所変更等お送り願いたいと要望。

この会館の門限は九時まで、それを過ぎること既に四十分も経ているのに早く切り上げて下さいと言つて来ないのはおかしいなとふと唇を見たら今日は仏滅。結婚式もなく、暇だったのであらう。それにしても寒い夜であった。(轡田記)

幹事会運営内規

- (一) 幹事会は原則として毎月第二木曜日開催するものとし、必要な場合にはその都度催す。
- (二) 会議は常任幹事の過半数の出席をもって成立するものとし、幹事長が主宰する。審議決定事項は会報に掲載しなければならぬ。
- (三) 必要と認められた場合には、会長あるいは顧問の出席を依頼し、また評議員の意見を求める。
- (四) 幹事長の承認を得て、部会単位または連合による部会を開催することができる。
- (五) 幹事会および協会の日常業務で軽微と認められる事項については、担当職員をして措置させることができる。